OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	神坂雪佳『うた絵』について ： 王朝美と近代の融合
Author(s)	矢野, 節子
Citation	デザイン理論. 2019, 74, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75323
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

神坂雪佳『うた絵』について
―王朝美と近代の融合―

矢野節子　神戸大学大学院

はじめに

神坂雪佳（1866–1942）は，四条派の絵画を学んだ後，明治 26（1893）年頃より図案家・岸光景（1839–1922）に師事し，第 4 回内国勧業博覧会（以下，内国博）出品作品などの助手を勤める。同時期にたちあげた芦手絵会の活動を 1 年ほど行う。その後，図案研究団体を主宰するなど，京都の工芸界の活性化に寄与した。雪佳の最後の作品集として，昭和 9（1934）年に芸艸堂より出版した版画集が『うた絵』である。発行された時期は，大正時代の後半から進んだ都市化が続き，新聞の挿絵の版画が人気を博し写真も一般的になるなど大衆文化が広く浸透した頃である。このような時代にあって，本作は大和綴りで，従来の浮世絵版画と同じ分業制作による上質な木版多色刷に加え，一部に空摺などを施すなど手間のかかった仕上げとなっている。内容は『古今和歌集』（以下，古今集）から採択した 25 首の和歌に取材し歌意を描いたもので，和歌の文字が葦手文様で表現されている。

本研究発表では，雪佳が参考にしたと思われる図様を特定し，制作意図について考察することを目的とする。

1. 主題とした和歌について

古今集に勅撰された和歌の時代は大きく 3 つに分かれる。最初は読み人知らずの時代，次に六歌仙時代，最後に古今集撰者時代となっているが，本作は撰者の作品を中心としている。古今集では春と秋の題材は鑑賞に適しているためか他の部立てより多数採られ，上下に分けて収録されている。本作においても春歌が 7 首，秋歌が 12 首と大半を占める。夏歌と冬歌はそれぞれ 1 首，2 首となっている。賀歌 3 首のうち，素性法師の 2 首が巻頭歌と巻軸歌を飾っている点に特徴がある。その他の 23 首の並び順には規則性がないように見える。

また，本作の 5 首の和歌の詞書にある寛平御時后宮歌合（以下，寛平后宮歌合）は，平安前期の歌合のことで，宇多天皇の母后班子女王が 893 年以前に催したといわれる。歌合とは，和歌の作者が左右に分かれて出題された歌題を詠み，出来栄えを競う催しのことで，古今集編纂に大きな役割を果たしたと伝わる。さらに，是貞親王家歌合が 3 首の詞書にある。この歌合は宇多天皇の兄が催したもので古今集には 23 首が採られている。他に，本作には寛平后宮歌合以前に催された内裏菊合から 1 首，898 年に朱雀院が催した女郎花合わせから 1 首を収録している。菊合，女郎花合とは，宮中で開かれた物合のことで種類の同じ物をもちより優劣を競い，和歌を詠み添える催しのことである。

以上のことから，雪佳は宮中文化を中心とした和歌を選び絵画化したのではないかと考える。

2. 図様の源泉について

雪佳が本作を製作するにあたって，参考にしたと思われる過去の名作を，①光琳歌留多，②謡本表紙，③琳派，④物語，⑤南画，⑥土佐派，⑦蒔絵と考えて分類した。それらについての分析を以下にまとめた。

①光琳歌留多

光琳歌留多は上の句に人物，下の句に様々な情景が描かれている。本作の続編と思われる『あしで絵』にも，光琳歌留多に影響を受けたと思われる図様がある。このことから雪佳は，歌絵と葦手絵を厳密に分けていなかったのではないかと推測する。

②謡本表紙

琳派の作家は謡曲に取材することが多く，謡本の表紙の図様をそのまま意匠として用いた作品が遺っている。本作もそれに倣っていると思われる。

③琳派，④物語

宗達，光琳の他に江戸琳派の表現にある，しっとりとした花鳥風月を表現している。

⑤南画

雪佳は芦手絵会で富岡鉄斎の指導を受けていることから，南画家の精神に影響を受けているのではないかと思われる。なお，高橋草坪『草坪画式』との類似が見られる。

⑥土佐派

本作には『土佐派絵画資料』（京都市立芸術大学芸術資料館所蔵）の安政度内裏造営に類似の図様が 4 点認められる。

⑦蒔絵

名作に影響を受けたと思われる意匠の他に，山本春正『春正百図』の図様を写した形跡がある。

3. 献上品との類似について

雪佳は，京都市美術学校で教鞭をとっていた大正 8（1919）年，皇室からのご下命を受ける。皇太子のご成年のお祝いとしての，美校への委嘱制作である。《歌蒔絵重硯箱》（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は，古今集の巻七賀歌に収められている，素性法師の「万世を松にぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば」に取材しており，松の蒔絵で吉祥を表している。《歌蒔絵文台》（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は，同じく賀歌に収められている紀貫之の歌「春くればやどにまづさく梅花 きみがちとせのかざしとぞみる」に取材している。檜垣に満開の梅の花を描き，「春くれは」，「君か」，「千とせの」の文字を散らしている。この和歌の詞書には，「もとやすのみこの，七十の賀のうしろの屏風によみてかきける」とあるが，人物を描かない留守絵の手法を用いた表現をしている。冬の厳しい寒さのなかにあって，常緑を保つ松と，春のさきがけとして咲く梅は親王へのお祝いに適した意匠となっている。そしてここには，光悦や光琳の蒔絵に見られる，散らし書きの文字が配されている。このような手法は，雪佳の他の工芸図案に見られない。光景の助手を勤めた，内国博出品作品と同様の手法である。

雪佳は一般消費者を対象とした図案には和歌の文字を象ったものを用いなかったが，献上品に意匠として施している点に特徴がある。

おわりに

本作は，古今集所収の寛平后宮歌合を中心とした撰者の作品を多く採用していること，土佐派粉本の御所内裏障壁画の図様が複数あることから，宮廷文化を描写する意図が認められる。葦手文様による和歌の文字を散らした意匠は，雪佳の工芸図案では皇室献上品以外には見られない点から王朝への憧れを表現していると考える。文字を配した歌絵は，光悦蒔絵を想起させる。京琳派においては和歌や物語を主題とし，それらは王朝を描いたものであった。

本作は近代的な手法として遠近法を取り入れ，南画や土佐派の要素を加えている。ここに雪佳が独自に形成した琳派の様式があると考える。